

宋代天童寺伽藍の規模について

横山秀哉

昭和五十二年（一九七七）九月永平寺において高祖道元禅師御忌中に天童如浄禅師七百五十回遠忌が併修され、その前後から高祖への思慕は浄祖への尊崇ともなり、両祖の旧蹟としての天童寺にも関心が高まり、日中事変などから四十年來跡絶えていた天童寺拝登の議も始まった。たまた

ま日中友好も回復され、文化革命時以來甚だしく荒廃していた天童寺伽藍も中国政府による大修理も始められ、わが宗門からも義捐の援助が起り、更に彼の寺内に「道元禅師得法靈蹟」の顕彰碑建立も計画されるに至る。一九八〇年には伽藍修理も成り、十一月十七日建碑も除幕されたのである。かかる機運に近年拝登者団参など天童寺を訪れた人は多数で、その地を踏んだ人々は両祖の靈蹟として深く懐古の情にふけられたことは当然であるが、若しも現在の中

宋代天童寺伽藍の規模について（横山）

国風の伽藍環境をそのまま道元禅師が在りし日に辨道起居されたたずまいと見て感傷を一入深くされたとしたらいささかゆき過ぎである。

道元禅師が入宋され如浄禅師を慕われて再度天童寺に登られたのは南宋の宝慶元年（一二二五）で、天童寺が義興禅師の開創地古天童から太白峰下の現地に移された至徳二年（七五七）以後のことではあるから現地が禅師の辨道得法の靈蹟であることには問題は無い。しかし伽藍の様相ともなると天童寺史に依れば、道元禅師帰朝後二十余年にして宝祐四年（一二五六）には天童寺が回祿の災に罹り、両祖ゆかりの建物で焼失したものも多かったであろうと思われ、宝祐六年寺宇宝閣の復興を告げられてもいるが時間的に見ていかがのものであろうか。

ともあれ一二七〇年代には早くも南宋は衰微し元が興り、一三六八年明に替り、その間にも諸殿堂の重建再興などが続けられ、宣徳七年（一四三〇）頃に至り旧観に復すともされている。

しかるに明の万曆十五年（一五八七）七月大洪水によって全山諸殿堂が一夜の間に悉くが流失の難を生じたとあり、これが復興具備されるのは主として崇禎四年（一六三二）頃から約十ヶ年を要したと伝えられ、恐らく地形まで変化し伽藍は一新したことであろう。しかも既にして清朝が興り、清代でも一部殿堂に焼失・重建・改修・増建なども行われたものが今度の修覆によって今日に至っているのである。

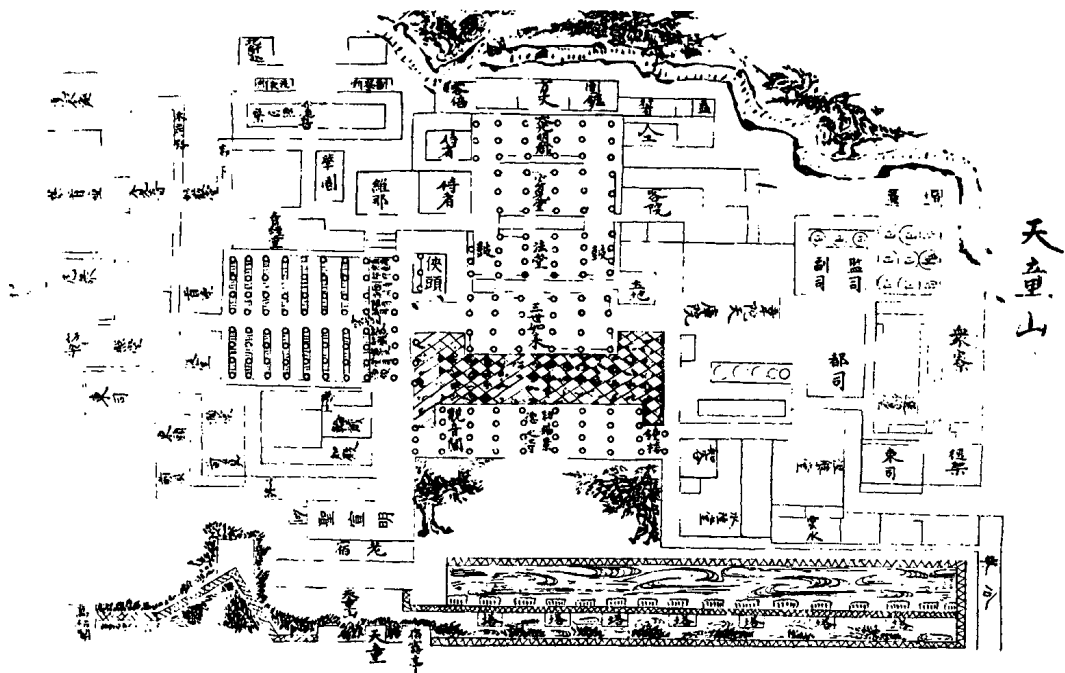
ところで、わが国では永く民族の統一独立により古い伝統が比較的よく保持されているが、中国においては南宋末からでも元・明を経て清に至る時の流れには国政への変革のみならず、民族の興替もあったわけで、思想習俗技術にも自づから変遷があり、その時代の風潮は彼の地禅院における修禅求道の生活上にも反映し、清規の形式や伽藍の規模様式にも変化の現われるのは当然である。更に元代から喇嘛教寺院の影響や明代になって発展した禅淨混淆の思想

は殿堂の内容にまで変様を生じさせたことであろう。あれこれ勘案するに現天童寺伽藍の実態は明末様の色彩が最も強いものと思われる。筆者は念願しながら不幸にもまだ拝登し現地踏査の機会を得ていないが『天童寺統志』所収の天童寺全図を見たり、近頃の拝登者からの見聞報告や写真に依って一層その感を深くした次第である。

しからは道元禪師が親しく辨道生活された頃の天童寺伽藍の様相如何となれば、その当時の遺構伝統を残さない現在としては文献資料などから推定するほかはないが、幸い当時の彼の地禅刹の実情を調査記録図写した図巻、金沢大乘寺蔵『五山十刹図』の如き支那禅刹図式がある。寺伝に依れば徹通義价が道元禪師の遺囑を奉じて永平建立大成のために正元元年、即ち南宋の開慶元年に入宋されて支那五山十刹を歴訪して禅林の規矩礼楽を手写将来したとされるもので、卷子仕立二巻から成り、国の重要文化財に指定されている。しかし重文指定でこれと描写筆致に多少の精粗の差はあるも全内容を同じくし聖一国師入宋将来とする『大宋諸山図』二巻（但し下巻は後補）が京都東福寺にも伝承されている。ところで両本とも大略室町中期頃の謄写本とするのが識者の見解で、同種の伝写本も福井永平寺や

仙台泰心院その他にも見られる。研究上これら支那禅刹図式の祖本が問題となるが、祖本と認められるものは現存せず、それが筆録作成の年次は内容より検討する以外に手段は無い。筆者は多年全図式を精査吟味の上南宋の淳祐七年（一二四七）頃、たとえ七年を降るとも多くは出ない（考証は拙著『禅の建築』第二章の三を参照）。従って仁治二年（一二四一）聖一国師帰朝後の作成であり、宝祐四年（一二五六）天童寺回祿前のものであることは明かで、開慶元年（一二五九）入宋した徹通義价では残念ながら筆録者には擬しがたいのである。かかる支那禅刹図式『五山十刹図』上巻に「杭州靈隱山」「天台万年山」とともに南宋時代の「天童山」の平面的見取図ではあるが詳細な伽藍図（下の附図参照、以下宋代図と略す）が見られるのである。それに依れば参道入口に「万松関」、しばらく進んで「天童」を過ぎて万工池の境に達する。図巻末記載「諸山額集」から「万松関」は外山門、「天童」は中門であり、近くに「宿露亭」なる庵があった。現に万松関ほか天童三関の称もあり、特に鉄蛇関近くにそびえる鎮隣塔（五仏塔）が眼につくそうだが宋代図には示されていない。鎮隣塔の創始は唐の会昌年間と伝えられ古いが、最近重建の清様式の多層の五仏塔とは違

宋代天童寺伽藍の規模について（横山）



五山十刹図所収天童山（仙台泰心院写本）

宋代天童寺伽藍の規模について（横山）

い、古くは一基の塔碑に過ぎなかったのではあるまいか。宋代図でも内外の万工池は図示され、七塔の並立の状も明記され、その万工池を前にして「勅賜景德之寺」と扁額する正山門が南面して建っていた。七間三戸の楼門（三門）を示すかと思われる平面描写で、右辺に「観音閣」と左辺に接して「鐘樓」と記入されるので楼閣造りであったことは間違いなく、図巻中には「天童山様山門扇」として扉の詳細も解るのである。

しかるに現在は万工池を前にして天王殿が在り、これを山門と解した人もあるうが、天王殿は通り抜け出来ても門では無く、元・明時代頃からの様式で中央に弥勒菩薩や韋駄天像などを安置し、両辺に喇嘛教的色彩の強い四天王像を配した護法堂で、わが国宇治黄檗山の万福寺天王殿などもその標準である。万福寺では天王殿の前方に別に堂々たる山門が建てられており、長崎崇福寺天王殿では門の構成では無い。しかし両辺に四天王像を配置する例として永平寺現山門が存在するが、もろん天王殿では無い。宋代図を見る限り天童山門では立証出来ないが、同図巻所収「天台万年山」山門図には左右に明かに「二天」と書き別けて附記されており、南宋時代禅刹山門の両辺に二天つつ四天王

を配した制（四天门）のあったことは間違いなく（古く二天门・二王門の制も行われた）その制が今に永平寺に伝承されているのである。

次に宋代図における天童寺山門の背奥には仏殿・法堂と並び、仏殿には「三世如来」と扁額され弥勒・釈迦・弥陀の三世仏を本尊としていたことは現永平寺と同断であり、所載別図に「天童様」として火灯窓や波形連子など所謂日本禅宗様（唐様とも呼ばれる）の外観を採っていたことが知られる。なお仏殿に向って右（東）に「土地堂」が建ち、左方（西）の「供頭」と記入を見る近くの対称位置建物は祖師堂で在った筈である。法堂ももろん土間床で両辺に「鼓」と法鼓と茶鼓の存在が特記されており、平面描写だけでは不詳だが図巻中の「径山寺法堂様」の構造などと同じく恐らく当時楼閣造りで、古くは法堂楼上二階には祖師像や羅漢像などが祀られたようである。

山門仏殿法堂を結ぶ中軸線上を奥へ「寂光堂」「大光明蔵」「方丈」と連接して建てられていた。「寂光堂」「大光明蔵」は前方丈で、「方丈」が内方丈であった。ここに前方丈とは公的な住持講礼の堂で、彼の地ではもろん土間床であったがわが国に至って畳敷き和風化され客殿とも呼ば

れ、客殿型法堂・本堂ともなるのである。住持安息の私室的内方丈でも彼の地の生活上土間床で天童「方丈」には「囲炉」の設けが特記されており、他寺の例から推察すると住持の坐禅室的施設も在ったものと思われる。ちなみにこれらの伽藍配置から正法眼蔵諸法実相の巻「大宋宝慶二年丙戌春三月のころ、夜間やや四更になりなんとするに、上方に鼓声三下きこゆ。坐具をとり、搭袈裟して雲堂の前門よりいづれば入室牌かかれり。まづ衆にしたがふて法堂上にいたる。法堂の西壁をへて寂光堂の西階をのぼる。寂光堂の西壁のまへをすぎて大光明蔵の西階をのぼる。大光明蔵は方丈なり」云々の記述の実況がまのあたり見られる思いである。

なおこれら方丈建築群に接して「客院」「侍者」「行者」等の寮舎の配置が見られるが、現天童寺最奥の高所に建つ羅漢堂は当時は無かった。明末清初の禅風を伝える宇治黄檗山万福寺における最奥高丘の威徳殿の存在と比すればその伽藍様式の時代性が了解出来るであろう。

さて宋代図では山門からの左右東西の廻廊について規模までは明かに描かれてはいないが、他の靈隠・万年等の伽藍図から見て様相は察せられ、仏殿の東、東廊に沿って

宋代天童寺伽藍の規模について（横山）

「庫院」が在った。庫院には中央に「韋駄天」が安置され、後部に「都司・監司・副司」等の居室や「醬・塩」などと記入される厨房が設けられていた。「庫院」に対する西廊側の大建築は記名はされぬが図示から見て所謂七間僧堂（雲堂）の構造で、奥行も広く七間に摘かれ『宏智禪師広録』に「前後十四間、二十架、三過廊、兩天井、日屋承雨、下無墻堵、縦二百尺、広十六丈」とある二十版にも及ぶ（現永平僧堂が十二版）規模と見るべく、聖僧など内堂の規模は省略描写であるが、外堂部分には都寺以下上下間の座位序列名も記入されており、古清規の進退に則る正規大僧堂であり、後世の禅堂（明清以後の坐禅堂）の規模では断じて無かった。もちろん庫院方面に齋堂（食堂）的施設は見られない。

宋代天童寺ではこの大雲堂（僧堂）の下間方面に並んで「輪蔵」や「蒙堂・前資」などの宿老寮舎等も見られたが注目すべきは背後方面で、上間側に衆寮「妙嚴堂」「照心寮」が配置され、「寮首座」「看経堂」「洗衣処」「把針処」などの建物が附属し、雲堂後門外「照堂」からは「後架」「東司」が設けられていた。ここにわが国禅宗七堂伽藍では山門の前方向って右に浴室、左に東司（西浄）を設ける

宋代天童寺伽藍の規模について（横山）

を制ともされるがこれは鎌倉建長寺創建頃から始まった形式らしく、南宋禅林ではなお東司や浴室は多分に実用的で最も適所に設置されていたようである。宋代図に見られる天童寺では浴室は「宣明」と呼んで山門外の向って左側に明和尚ゆかりの「了然寮」と並んで、右側の「水陸堂」「涅槃堂」と相對して設けられていた。ちなみに当時の東司や浴室の施設詳細は図巻中に所収「育王山後架」「金山寺東司」「蔣山小遺処」「天童山宣明」などの図を参照すれば正法眼蔵洗淨の卷などの清規作法が具体的に解かる（拙著『禅の建築』第四章参照）。

なおここに注目したいのは宋代図天童寺庫院の背後に当り「選僧堂」が設置されていたことである。語呂や用字が類似するので掛搭の衆僧の坐禅辨道により仏祖を選出する選仏場（僧堂）と混同して第二の僧堂などに見なす人もあるが、これは行者堂（行堂）の正名である。即ち若く出家を求めてまだ得度せず専ら寺内に在って諸役に給仕する所謂行者が清僧に選出されるべき辨道修行の道場であり、その規矩は全く僧堂に準じたらしく、近くに専修の「衆寮」「後架」「東司」の設けまでであったのである。

かように支那禅刹図式『五山十刹図』によってわが国禅

宗七堂伽藍の原流ともなった南宋時代の太白山天童景德禅寺の伽藍様を見てくると、始めて道元禅師の『辨道法』以下正法眼蔵御垂示の実態が納得出来、環境が立証され得るのである。今も永平寺にはたとえ日本建築化してもそれら古規の具現が伝承されていることを感じ得るのであって、かえって中国天童寺伽藍現況雰囲気ともなると寧ろ黄檗山万福寺に相通するものを覚えるのではなからうか。